新治療法、30日から導入

下肢静脈瘤

磐田市立総合病院

県内初 患者の痛み軽減

血管内塞栓術を説明する斉藤貴明血管外科長＝13日、磐田市大久保の市立総合病院

磐田市立総合病院（同市大久保）は30日から、下肢静脈瘤（りゅう）の新しい治療法「血管内塞栓（そくせん）術」を県内で初めて導入する。2019年12月に厚生労働省が認可した治療法で、同病院の斉藤貴明血管外科長によると、「従来の治療法に比べ、患者の身体的負担の軽減が期待できる」という。

下肢静脈瘤は脚の静脈の病気。通常は血管内の逆流防止弁が開閉し、血液が心臓に戻るのを助けるが、加齢などで弁の機能が弱まり、心臓に戻るはずの血液が逆流すると、血管が拡張して下肢静脈瘤になる。

これまでは、発症した部位にカテーテルを挿入して血管を焼くことで血栓を作り、血流を停止させる「血管内焼灼（しょうしゃく）術」が主流だった。この方法は患部周辺に低濃度の局所麻酔を複数注射するため、術後にあざや痛みを伴うことがあった。

「血管内塞栓術」では、血管内部にカテーテルで専用の接着剤を注入して固め、血流を止める。麻酔は針を刺す部位のみで、あざや痛みを軽減できる可能性が高いという。臨床試験などで症例を集め、安全確認が取れたため、全国で導入が始まりつつある。

命に関わる病気ではないが、放置すると、かゆみや皮膚潰瘍につながる。国内の45歳以上では、女性の約25％、男性の約12％が罹患（りかん）しているという。同病院でも年間で40～50人の患者がいるという。

斉藤血管外科長は「手術が簡略化され、医師の負担も減る。下肢静脈瘤治療の選択肢の一つとして提供していきたい」と話している。

（磐田支局・駒木千尋）

静岡新聞

© 静岡新聞社　無断複製転載を禁じます